

## 広島大学の将来像について

——地域との結びつきをどう模索するか——

社東広島青年会議所理事長 西田 修司

### ●『異邦人』たちの東広島

かつてこの地域は、造り酒屋の立ち並ぶ煙突と赤い瓦の家並以外にこれといって特徴のない、どこにでもある地方の町に過ぎなかった。四町の合併により市としての体裁は整ったものの、その将来像はぼやけたままであった。やがて、広島大学の移転を待っていたかのように、新幹線駅が出来、山陽自動車道が開通し、また新空港も近くにやってくる事が決定した。テクノポリスの指定を受け、それに伴い大手企業の進出も増えた。最近では近畿大学工学部も高屋町への移転を決めた。当然、転入人口も増加した。統計を見ても、出生数はさほど多くないのに人口増加率は県内他市に比べ突出している。しかし、市としてのアイデンティティや中心性は依然ぼやけたまま、また市全体の地域文化の方向を見いだせないまま現在に至っているのが実状である。

新たにやって来た人々は、言うなれば『異邦人』である。文字どおり外国からの留学生や研修生もいれば、国内でも遠方から赴任して来る人は後を絶たない。また、学生の転入によって一気に増える若年層は、静かな田舎町にとっては、まさにエイリアンの侵入に匹敵する事態であろう。逆に、急激に変化する環境や旧来の温かさを失いつつある人間関係にとまどう旧住民もまた自分が『異邦人』になったようだと感じている。

好むと好まざるとにかかわらず、その『異邦人』たちが、この地域の古い伝統を受け継ぎ、また凌駕し、新しい文化を形成して行くのである。そして、その、人と文化の育成交流拠点として先導的役割を果たすのが広島大学である。東広島市がハイクオリティな都市

へと脱皮する過程において、これから生み出される新しいものの多くがキャンパスからの風を受けていなければならないのだ。

### ●施設開放と情報提供

昭和61年7月に出された西条総合運動場の地域団体使用状況を見てみると、学校・官公庁以外では東広島テニス協会だけであった。これでは開放されているとは言いがたい。少なくとも全市的な行事には協力できる体制づくりが必要である。

また、キャンパス近辺には鏡山公園や三城古墳があり、コンサート会場や博物館など、学生や教職員と市民が共に過ごせる施設を設置できる環境が整っているのである。これらの施設が、当初から市民の利用を考慮にいられて計画されることを期待したい。

次に、図書館の蔵書は以前は学外の人も借りることができたが、現在は原則として貸し出さないようになっているそうである。図書館という施設に対する市民の意識の低さも問題ではあるが、すぐにシャットアウトしてしまう大学側の対応にも問題なしとは言えない。貸出しできる蔵書を制限したり、利用者のIDチェック強化など、方策はいろいろあるように思う。

情報提供という面から言えば、現在構築されつつある学内LANの一部を学外開放し、外部のパソコンから電話回線を通じて、蔵書の検索や最新の研究情報などが取り出せるようにも出来るはずである。そしてまた、そういう設備を利用したセミナーの開設や市民とのコミュニケーション、企業との情報交換も可能であることを申し添えておきたい。

### ●知的センターとしての役割

生涯教育や夜間大学への対応は、既に例もあることであり、大学としてはそれほど難しいことではないと思う。カリキュラムや施設の整備は早急になされなければならない。が、その用意が整ったからといって、市民が積極的に参加するかどうかはまた別問題である。そこでまず当面は市民意識のレベルアップを図ることと、市民が大学を身近なものとして感じられるイベントが必要なのではないだろうか。

例えば、公民館で市などが開催している文化教室（カルチャースクール）へ講師として参加し、「廣大フォーラム」の「開かれた学問」シリーズと同じテーマと担当者で、毎月1回のセミナーを開いてみてはどうだろうか。また、キャンパスの立地条件を利用した夏の夜の星座講座、学問・研究の最前線である研究施設の見学会、有名人による特別公開講義なども考えられる。もっと高度に学究的なニーズに対しては、教育関係者や専門技術者のためのセミナー開催やFAXによる相談受付なども可能であろう。

ただ、それらが大学の主催によって実施されればいいというものではない。市や、事業に関連する各市民団体を巻き込むことで、より広範な市民からの支持が期待できるはずであり、ひいてはそれが市民との交流事業へ発展すると予想できるからである。

### ●文化的活動の学外サークル化

学部の移設が進むにつれ、新キャンパスでも学内のサークル活動が活発化していると思う。私たちは、それを学内にとどめず、市民も巻き込んだ活動に広げていただきたいと考えている。また逆に、学生や教職員の方々に、市民のサークルに積極的に参入していただきたいと考えている。大学の有為で多様な人材が地域で活躍されることこそ、私たちが望んでいることなのである。

文化を生み出し支えるのは、組織ではなく個人のつながりである。従って大学当局には、

そういう個人的レベルの活動に対して支援できる体制を強化してほしい。

その具体的な方法としては、既にある程度実現していることではあるが、例えば文化祭や体育祭に市民が参加出来る場を設けるとか、市内での各催しへ積極的に参画するなどが考えられる。特にスポーツやキャンプなどの屋外での催しは、人的交流において親密度を高めるのに非常に効果がある。

またそういう場に各国からの留学生を巻き込むことによって、国際交流とまでは行かなくても、地域住民の留学生理解、留学生の地域理解も期待できるのではないだろうか。それがひいては市の国際化へ向けての背景になり得ることは言うまでもない。

### ●人的な交流を！

かつて、大学内の施設構想の目的の中には、「人間の触れ合いの場としての大学」、「市民性育成の場としての大学」が挙げられていた。ところがキャンパスの立地条件は、都市計画的には街づくりの中核となりながら、市民と日常的に邂逅できる場所ではないし、各種施設の構成も設置規準に従っただけのものになってしまった。だが、だからこそむしろ、市民と大学人とが積極的に交流する努力が必要なのだと考えたい。私たちが期待するのは、ただ単に規模や学究環境が優れた象牙の塔ではなく、市民にとっても魅力あふれる大学なのである。つまり私たちが求めているのは、広島大学という施設との関係ではなく、広島大学に所属する人たちと市民との「個」の部分でのふれ合いなのである。

都市の利便性は当局の努力でこれから徐々に良くなるに違いないが、東広島市に決定的に欠けている人材と文化の側面をレベルアップして行くためには人的パワーが必要である。その点において私たちが広島大学に期待する部分は非常に大きいのである。

地域への窓口として、また社会人などパートタイム学生の受け入れ窓口として、「地域協力センター」あるいは「生涯教育センター」

等の構想はぜひとも早急に実現しなければならないとしても、まず学内の人々が地域を意識し、大学人として地域に対して何が提言できるかを自分なりに模索することこそ、最も重要であると考えます。

移転後の生活状況

# 福山から西条へ

## —— 流転の中での生活 ——

教育学部 三好啓士

教育学部福山分校の西条キャンパスへの移転作業の中で、平成元年8月7日、その出発式が行われ、藤谷分校主事他によるテープカットの後、移転荷物を満載した大型トラックが列をなしてゲートをくぐり、西条へ向けて出発した。その中には荷物だけではなく、福山分校の歴史も積み込まれていた。移転によってもその歴史は消え去るものではない。この出発式は、同時に9月30日までの福山分校の終了式として40年の歴史を閉じる予告でもあり、また西条へ向けて、教育学部の統合として、過去とともに未来への研究・教育の充実を目指した、多少の不安も含みながらも明るい未来への期待を積み込んでの出発であった。そして今、8月下旬までの精神的にも肉体的にも苦しい移転作業を経て、9月になり新教育学部として新しい建物、新生活での混迷の中で、それは新しい場所と2部局統合による混迷だが、研究・教育活動が始まり、10月からの完全統合として未来へ、教育学部の発展へと歩み出している。そして移転後の生活状況を述べるのには過去としての福山分校と移転のプロセス、統合後の教育学部の関連の中で考えてこそ真の意味が伝わるのではないかと考えている。なお、ここでの生活とは教育学部での研究・教育・事務などの生活、それにかかわっての日常生活を指している。

地域の変革におけるあらゆる局面に広島大学が与えるインパクトの大きさに気づき始めた市民は、その動向をあらためて注視しているのだ。

福山分校の思い出はつきない。多くの喜びも悲しみも40年の年月の中で醸造された。それをもたらしたのは分校が福山という広島から離れた遠隔地での存在にあった。それは地理的・時間的距離もさることながら同じ教育学部なのに2部局に分離されていたことであり、それには長所も短所もあった。まず、大学の外部から分校の存在が正しく認識されず、分校という語から過少評価された面もあったことなどである。福山分校は音楽・体育・家政3科の教官と学生、5科・教職関係の教官及び事務官よりなる小さなまとまりとして独立した管理・運営、研究・教育の組織と設備をもち、それぞれ専門的に研究・教育を深め、教官も事務官などの職員も学生も、特に教科の特性も含んで、1家族のようにまとまり、人間的交流も研究・教育の交流も深めてこれたと思う。また市民との交流も深く、少しは福山市のために役立てたと自負している。今は西条キャンパスに移転したばかりの流転の中で成果も挙がっていないし確言はできないが、今の西条での生活、特に日常生活と比較すると分校にかかわっての諸生活の方が良かったとさえ思える。しかしその反面、分校にかかわっては研究・教育・生活とも「井の中の蛙」的な自己満足と見識の狭量さもあったことは否定できない。